

平成30年 5月24日現在

機関番号：13301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13248

研究課題名(和文) 吃音のある中高生・青年のための吃音のある人によるメンター養成プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of the mentor training program by the people who stutter for the adolescents who stutter.

研究代表者

小林 宏明(Hiroaki, Kobayashi)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：50334024

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：吃音のある中高生・青年のための「同じ悩みを経験した吃音当事者による支援」の担い手となるメンター(信頼のおける相談相手)を養成するプログラム開発を目的に、(1)発達障害者のペアレントメンターや吃音当事者団体による吃音のある中高生・青年へのピア支援についての文献及び実地調査等、(2)吃音のある成人85名を対象とした吃音のある人同士の相談に関するアンケート調査、(3)吃音のある子どもの保護者244名を対象とした吃音のある人への相談の実態に関するアンケート調査、(4)吃音のある成人当事者7名を対象としたメンター養成講座の試行を行った。そして、これらの研究を踏まえ、メンター養成プログラムを作成した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of current research is to develop a program to train mentors (trusted peer consultants) for the adolescents who stutter. We conducted the following four studies. 1) the literature research and field survey which focused peer support for parent of children who suffer from developmental disorders by "parent mentors" and peer support for adolescents who stutter by adult who stutter. 2) The questionnaire survey on the peer-consultation to people who stutter targeted 85 adults who stutter. 3) The questionnaire survey on the consultation to adults who stutter targeted 244 parents of children who stutter. 4) Trial of seminar of the mentor training course targeting 7 adult people with stuttering. Based on these studies, we developed the mentor training program by the people who stutter for the adolescents who stutter.

研究分野：特別支援教育

キーワード：吃音 中高生 青年 メンター 特別支援教育 セルフヘルプ・グループ

1. 研究開始当初の背景

近年、発達障害児・者の支援として、発達障害のある子どもの保護者がペアレント・メンターとなってこれらの障害のある子どもの保護者の支援を行う取り組みが注目されている[1]。ペアレント・メンターは、同じ悩みを持つ者同士という共感性や、実際に発達障害がある子どもの保護者として子どもを育てたり医療、福祉、教育サービスを受けたりする当事者としての経験に基づいた助言など、専門家とは異なった観点に立った支援の担い手として注目されている。

吃音のある中学生・高校生(以下、中高生)・青年に対する支援においては、吃音のある人のセルフヘルプ・グループ主催の「中高生のつどい」「吃音のある人のつどい」の取り組み[2]など、吃音当事者がメンターとなって支援する取り組みが既に行われている。これらの取り組みは、単に吃音のある中高生・青年にとって有益だけでなく、メンターとなる吃音当事者にとっても、自身の吃音の問題を整理したり、自己効能感を高めたりするなどの利益が得られる、「Win-Win」の関係をもたらすことが知られている。しかし、吃音当事者は、メンターを行う上で必要な吃音の基礎知識や吃音のある人を支える地域情報、傾聴などの面接の技術などを持ち合わせていないため、誤った情報を提供したり、面接時にトラブルが生じたりすることが少なくない[3]。

2. 研究の目的

吃音のある中高生・青年のための「同じ悩みを経験した吃音当事者による支援」の担い手となるメンター(信頼のおける相談相手)を養成するプログラムを開発する。

3. 研究の方法

以下の研究 1~4 を実施すると共に、これらの研究成果を踏まえ、「吃音のある人のための、吃音のある人によるメンター講座」プログラムを作成する。

研究 1 発達障害ペアレント・メンター及び吃音のある中高生・青年へのピア支援の実態把握

厚生労働省の発達障害者支援体制整備事業に組み込まれているペアレント・メンターや、現在我が国で行われている吃音当事者団体による吃音のある中高生・青年へのピア支援についての文献及び実地調査、金沢大学人間社会研究域学校教育系小林宏明研究室で行っている吃音のある中高生のつどいにおける成人の吃音のある人によるピア支援の実態調査を行う。

研究 2 吃音のある人同士の相談に関する実態調査

吃音のある人のセルフヘルプ・グループ(SHG)に所属する吃音のある 18 歳以上の成

人 85 名を対象に、I. 吃音のある人に相談した経験と、II. 吃音のある人から相談を受けた経験に関する 17 項目からなるアンケート調査を実施する(表 1)。アンケート調査は、Web 上のアンケートフォームを用いて行う。なお、紙媒体での回答を希望した一部の回答者にはアンケート用紙を郵送し回答後返送するよう依頼する。本研究の実施にあたっては、「金沢大学人間社会研究域人対象とした倫理審査委員会」及び「国立障害者リハビリテーションセンター倫理審査委員会」の承認を受ける。

表 1 研究 2 のアンケート項目

吃音のある人に相談した経験について	
• -1.【全員】相談をした経験の有無	
• -2.【経験あり】した相談の形式	
• -3.【経験あり】した相談の内容	
• -4.【経験あり】相談して満足したこと	
• -5.【経験あり】相談して不満だったこと	
• -6.【経験なし】相談しなかった理由	
• -7.【経験なし】機会があったらしたい相談	
• -8.【全員】相談する利点	
吃音のある人からの相談を受けた経験について	
• -1.【全員】相談を受けた経験の有無	
• -2.【経験あり】受けた相談の形式	
• -3.【経験あり】受けた相談の内容	
• -4.【経験あり】受けた相談でうまくいったこと	
• -5.【経験あり】受けた相談でうまくいかなかったこと	
• -6.【経験なし】相談を受けなかった理由	
• -7.【経験なし】機会があったら受けたい相談	
• -8.【全員】相談を受ける利点	
• -9.【全員】よりよい相談相手になるために必要なこと	

研究 3 吃音のある人による、吃音のある子どもの保護者からの相談対応に関する実態調査

吃音のある子どもの保護者の会に所属、あるいは医療機関や通級指導教室で診療や教育を受ける吃音のある子どもの保護者 244 名を対象に、吃音のある人に相談した経験に関する 8 項目からなるアンケート調査を実施する(表 2)。アンケート調査は、Web 上のアンケートフォームを用いて行う。なお、紙媒体での回答を希望した一部の回答者にはアンケート用紙を郵送し回答後返送するよう依頼する。本研究の実施にあたっては、「金沢大学人間社会研究域人対象とした倫理審査委員会」の承認を受ける。

表 2 研究 3 のアンケート項目

• 1.【全員】相談をした経験の有無
• 2.【経験あり】した相談の形式
• 3.【経験あり】した相談の内容
• 4.【経験あり】相談して満足したこと
• 5.【経験あり】相談して不満だったこと
• 6.【経験なし】相談しなかった理由
• 7.【経験なし】機会があったらしたい相談
• 8.【全員】相談する利点

研究 4 吃音のある人のためのメンター養成研修の実証調査

研究 1～3 の結果を踏まえて作成した「吃音のある人のための、吃音のある人によるメンター講座試行版（以下、講座試作版）」に基づき、2 日間の日程で、メンター養成研修の試行（以下養成研修試行）を行い、講座試作版の利点や課題の検証を行う。

対象は、吃音のある成人当事者 7 名。対象の内 5 名は、言語聴覚士や臨床心理士など吃音臨床の専門職に従事していた（表 3）。

本調査は、(1) 事前アンケート、(2) 講座試作版に基づく養成研修試行の受講、(3) 事後アンケートから構成される。

(1) では、対象者にこれまで吃音のある人との相談を受けた経験や養成研修試行に期待すること、吃音のある人との相談への意識を尋ねる。

(2) では、対象者に講座試作版に基づく養成研修試行（表 4）を受講してもらい、講座試作版の内容や養成研修試行の実施方法についての意見を求める。

(3) では、養成研修試行の有用地や養成研修試行受講前後の吃音のある人との相談や支援に関する意識の変化を尋ねる。

本研究の実施にあたっては、「金沢大学人間社会研究域人対象とした倫理審査委員会」の承認を受ける。

表 3 研究 4 の対象

	年齢	性別	SHG での相談経験*	備考
A	30 代	男	10 年、20 名程度	
B	20 代	男	1 年、40 名程度	
C	20 代	男	0 年、0 名	ST**
D	20 代	男	0 年、0 名	ST**
E	20 代	男	6 年、3 名	CP***
F	20 代	男	0 年、0 名	ST**
G	20 代	女	0 年、0 名	

* 吃音のある人との相談年数、1 年あたりのおおよその相談人数

** ST 言語聴覚士

*** CP 臨床心理士

表 4 養成研修試行プログラムの概要

1 日目	
10:00～11:50	出合いのアクティビティー
11:00～12:00	メンターとは
	・（昼食）
13:00～14:00	実態調査の結果報告
14:15～15:15	吃音の基礎知識
2 日目	
10:00～10:45	リソースブック作り
11:00～12:00	相談の基礎知識
	・（昼食）
13:00～15:00	傾聴相談ロールプレイ

4. 研究成果

研究 1

日本自閉症協会では、2005 年にペアレント・メンター養成研修を開始し、現在では、各都道府県の発達障害者支援センターなどが中心となり、日本全国で養成研修が行われている。日本自閉症協会では、ペアレント・メンター活動の目的や役割、倫理などを示し

た「ペアレント・メンター ガイドライン」を定めると共に、ペアレント・メンター養成講座メニュー（基礎編、応用編、サポートブック作成編）を設けている[4]（表 5）。

一方、吃音のある人のセルフヘルプ・グループでは、1966 年の言友会設立より 50 年を超える活動を積み重ねる中で、「体験的知識の組織的集積」[5]、「わかちあい、ひとりだち、ときはなち」[6]、「支援者治療原理」[7]、「プロシューマーとしての支援」[5][8][9]といった専門家にはできない、セルフヘルプ・グループならではの「独自の専門性」に基づく支援を行っている。

また、金沢大学人間社会研究域学校教育系小林宏明研究室で行っている吃音のある中高生のつどいにスタッフとして参加した吃音のある成人への聞き取り調査では、「吃音で困っている中高生の役に立ちたい」、「自身の吃音の体験（吃音での困難を乗り越えたこと、吃音を自身の一部としてうまく付き合っていることなど）を中高生に伝え、参考にして欲しい」などのコメントがある一方で、「中高生に不用意なことを話して、かえって悪影響を及ぼすのではないか心配」、「自分は吃音の当事者ではあるが、専門家ではないので、どこまで中高生に助言やコメントすれば良いか迷う」などのコメントもあった。

表 5 ペアレント・メンター養成研修メニュー[4]

<ul style="list-style-type: none"> ● 基礎編 <ul style="list-style-type: none"> ● 発達障害の基礎知識（医療・教育・福祉） ● リソースブックとその作り方 ● 相談の基礎技術 ● 傾聴相談ロールプレイ ● 応用編 <ul style="list-style-type: none"> ● 行政による地域での支援システムの理解とペアレント・メンターの果たす役割 ● 電話相談の特性と進め方 ● グループ相談（インシデント・プロセス法）とその進め方 ● サポートブック作成編 <ul style="list-style-type: none"> ● サポートブックの作り方 ● サポートブック作成講習会の開き方
--

研究 2

相談した経験のある人は 69 人（81%）だった。相談した経験のある人に相談の内容を尋ねたところ、「現在の生活の困難への対処法」（52 名、75%）、「吃音への向かい合い方」（45 名、65%）、「将来の不安への対処法」（43 名、62%）、「セルフヘルプ・グループの情報」（36 名、52%）、「発話の練習法」（35 名、51%）の各項目の回答が過半数を超えた。また、相談した経験のある人に相談して満足したことを尋ねたところ、「吃音の知識を得ることができた」（42 名、61%）、「親身になって相談を聞いてもらい嬉しかった」（40 名、58%）、「同じ吃音のある人の話は説得力があり、共感できた」（40 名、58%）、「吃音の改善に参考になりそうな情報が得られた」（40 名、58%）、「吃音の専門機関やセルフヘルプ・グ

ループの情報が得ることができた」(35名、51%)の各項目の回答が過半数を超えた。一方、相談した経験のある人に相談して不満だったことを尋ねたところ、過半数を超えた項目はなく、「不満だったことはない」(24名、35%)の回答が多く見られた。ただし、中には「相談相手の考えが自分と合わなかった」(28名、41%)「提案された吃音の対処法が自分にはできないと感じた」(21名、30%)などの回答もあった。回答者全員に吃音のある人に相談する利点を尋ねたところ、「吃音のある人だと、自分の悩みを深く理解してもらえる」(60名、71%)「吃音のある人が、どのように毎日の生活を過ごしたり、どんな意見や考えを持っていたりするのかを知れる」(55名、65%)「吃音のある人の仲間が得られる」(54名、64%)「吃音のある人だと、軽い気持ちで楽に相談できる」(52名、61%)「吃音のある人だと親身になって相談を受けてくれる」(47名、55%)の各項目の回答が過半数を超えた。

相談を受けた経験ある人は、50名(59%)だった。相談を受けた経験のある人に、これまで受けたことのある相談の内容を尋ねたところ、「現在の生活の困難への対処法」(40名、80%)「将来の不安への対処法」(37名、74%)「吃音への向かい合い方」(34名、68%)の各項目の回答が過半数を超えた。また、相談を受けた経験のある人(50名)に、相談でうまくいったことを尋ねたところ、「相談者の悩みに共感できた」(33名、66%)「吃音の改善に参考になりそうな情報を伝えられた」(26名、52%)の各項目の回答が過半数を超えた。さらに、過半数には至らなかったものの比較的回答が多かった項目には、「親身になって相談を受ける事ができた」(24名、48%)「相談者の悩みを解決したり、解決のヒントを示したりできた」(23名、46%)「吃音の困難や不安を軽減する対処法を伝えられた」(22名、44%)「自分の意見や考えに納得してくれた」(21名、42%)「吃音への向かい合い方や発話の練習方法を伝えられた」(20名、40%)などがあった。一方、相談を受けた経験のある人(50名)に、相談でうまくいかなかったことを尋ねたところ、過半数を超えた項目はなく、「うまくいかなかったことはない」(11名、22%)の回答も一定数見られた。ただし、中には「吃音の改善に参考になりそうな情報を伝えられなかった」(15名、30%)などの回答もあった。回答者全員に、吃音のある人からの相談を受ける利点を尋ねたところ、「自分の吃音の経験を、吃音に悩む人に役立ててもらえる」(60名、71%)「吃音に悩む人の役に立つことができる」(58名、68%)「相談を受けることで、自身の吃音を振り返って考える機会が得られる」(49名、58%)「相談を受けることで、自身が成長することができる」(44名、52%)の各項目の回答が過半数を超えた。さらに、回答者全員に、よりよい相談相手になるため

に必要なことを尋ねたところ、「吃音の向かい合い方についての情報」(65名、76%)「吃音の基本的な情報」(61名、72%)「吃音の困難の対処法についての情報」(60名、71%)「セルフヘルプ・グループの情報」(49名、58%)の各項目の回答が過半数を超えた。

アンケート調査の結果から、親身になって相談する、共感するなどの相談の姿勢や、吃音のある人としての経験に基づく情報への満足が大きいと考えられた。また、相談を受ける側の満足度が高く、自身の吃音を振り返る機会にもなっていることが伺われた。これらは、研究1にある「体験的知識の組織的集積」¹⁾「わかちあい、ひとりだち、ときはなち」²⁾「支援者治療原理」³⁾「プロシューマーとしての支援」といったセルフヘルプ・グループグループならではの「独自の専門性」に基づく支援が吃音のSHGで行われていることを示唆すると考えられた。ただし、少数であったものの相談に不満を感じた意見があったことから、相談をする側と受ける側で吃音のとらえ方や対処法に対する考えや価値観が異なる場合の対応策などについて検討する必要があると考えられた。

研究3

相談した経験のある人は126人(52%)だった。相談した経験のある人に、これまでしたことのある相談の内容を尋ねたところ、「子どもの吃音に対する保護者の向かい合い方」(93名、74%)「子どもの吃音への向かい合い方」(88名、70%)「子どもの現在の生活の困難への対処法」(75名、60%)「吃音の基本的な情報」(67名、53%)「吃音の治療や治療を行う専門機関の情報」(65名、52%)「子どもの将来の不安への対処法」(64名、51%)の各項目の回答が過半数を超えた。また、相談した経験のある人に、相談して満足したことを尋ねたところ、「同じ吃音のある人の話は説得力があり、共感できた」(82名、65%)「吃音の知識を得ることができた」(78名、62%)「親身になって相談を聞いてもらい嬉しかった」(71名、56%)「子どもの吃音の困難や不安への対処法を知ることができた」(66名、52%)「悩みが解決したり、解決のヒントが得られたりした」(63名、50%)の各項目の回答が過半数を超えた。一方、相談した経験のある人に、相談して不満だったことを尋ねたところ、過半数を超えた項目はなく、「不満だったことはない」(60名、48%)の回答も多く見られた。ただし、少数であったものの「提案された吃音への対処法が子どもにはできないと感じた」(19名、15%)「相談相手の考えが、自分とは合わなかった」(15名、12%)「相談相手の考えを押しつけられた」(13名、10%)と回答した保護者や、自由記述に「就学前の子どもの吃音相談をしたら、『治らないタイプの吃音っばいですね』と言われて落ち込んだ」⁴⁾「母親に非があるかのように問いただされたこと

が残念だった」、「『母親の愛情が足りない』、『接し方が悪い』と言われて大変ショックを受けた」などと回答した者もいた。回答者全員に、吃音のある人に相談する利点を尋ねたところ、「吃音のある人が、どのように毎日の生活を過ごしたり、どんな意見や考えをもっていたりするのかを知れる」(189名、77%)、「吃音のある人だと、子どもの悩みを深く理解してもらえる」(156名、64%)の各項目の回答が過半数を超えた。さらに、比較的回答が多かった項目には、「吃音のある人だと親身になって相談を受けてくれる」(95名、39%)、「専門家に相談しても解決できない悩みが解決できたり、解決のヒントが得られたりする」(92名、38%)、「吃音のある人の仲間が得られる」(82名、34%)などがあった。

アンケート調査の結果から、研究2と同様、親身になって相談する、共感するなどの相談の姿勢や、吃音のある人としての経験に基づく情報への満足が大きいと考えられ、保護者への相談においても、研究1にある「体験的知識の組織的集積」、「わかちあい、ひとりたち、ときはなち」、「支援者治療原理」、「プロシューマーとしての支援」といったセルフヘルプ・グループグループならでは「独自の専門性」に基づく支援の有効性が示唆された。ただし、研究2同様、少数であった。

表5 事後アンケートの結果

	1	2	3	4	5
講習全体を通して	あてはまる	あてはまらない			
メンターにとって有益	7	0	0	0	0
メンターをする上で役立つ	7	0	0	0	0
メンターにとって内容が多い	0	3	3	1	0
メンターにとって難しい	0	1	3	2	1
メンターにとって受講は大変	0	1	1	4	1
メンターにとって楽しい	3	2	2	0	0
個別のプログラムについて	必要			不要	
出会いのアクティビティ	4	3	0	0	0
メンターとは	5	1	1	0	0
実態調査の結果報告	5	0	2	0	0
吃音の基礎知識	5	1	1	0	0
リソースブック作り	3	3	0	1	0
相談の基礎知識	5	2	0	0	0
傾聴相談ロールプレイ	6	0	1	0	0

表6 講座試作版及び養成研修試行プログラムへの意見(講義全体・主なもの)

- 実際にメンターを経験した人との意見交換会があると良い。
- 当事者としてでは知ることのできないこと(吃音の基礎知識の中の吃音に関する統計的データなど)を知ることができたのは有益だった。
- 1日で終わるプログラムの方が参加しやすいと思う。
- 講義が多かったので、ロールプレイやデモDVDなどをもっと利用した方がよいと思った。
- メンター講座を受講する人は相談した経験のある人が多いと思うので、これまでの相談経験について話す(これまで経験した困った相談の例など)があってもよいと思った。
- 保護者からの相談への対処についても知りたい。

- 2日目の午後など、疲れてきた頃にロールプレイがあると楽しく活動ができたと思った。
- 参加者同士のコミュニケーションも有意義だった。

たものの相談に不満を感じた意見があったことから、吃音のある人と保護者として吃音のとらえ方や対処法に対する考えや価値観が異なる場合の対応策の検討が必要なことや、吃音

表7 講座試作版及び養成研修試行プログラムへの意見(個別のプログラム・主なもの)

出会いのアクティビティ	<ul style="list-style-type: none"> • もっと多くのアクティビティの紹介があっても良い。 • アクティビティの参考文献があると良い。
メンターとは	<ul style="list-style-type: none"> • メンターをする際の役割や姿勢、目的を強調しても良い。 • メンター活動がどのような場どのように役立つのか、具体的な説明があると良い。 • メンターの役割を相談者に理解してもらってから相談する必要があることも伝えられると良い。 • 今、考えられるデメリットを少なくする方法についての情報があると良い。 • 相談活動に「テレビ電話」の可能性を追加してはどうか。 • 発達障害のペアレント・メンター活動の紹介があると、メンター活動をさらに理解出来ると感じた。 • 吃音のある当事者の支援と保護者支援の違いについて解説があると良い。
実態調査の結果報告	<ul style="list-style-type: none"> • 情報量が多いので、特に必要な点をピックアップするのも良い。 • 相談をした、受けた場合にうまくいったこと、いかなかったことの背景をもう少し知りたい。
吃音の基礎知識	<ul style="list-style-type: none"> • 吃音以外の障害や問題がある場合の対処方法の情報があると良い。 • 内容が、専門家ではない一般の人には少し難しいと感じた。 • 吃音改善法についての情報が知りたい。 • 合理的配慮の具体例が多いと、実際の相談で役立つと感じた。 • 吃音に関する一般書や専門書の紹介があると、相談者に相談できると感じた。 • 吃音には、様々な捉え方があることを事例を挙げながら説明するとよいと思う。
リソースブック作り	<ul style="list-style-type: none"> • リソースブック作りは大きな労力が必要で、また、現時点では、リソースブックに載せる情報を十分揃えることが難しいため、メンターがリソースブックを作る必要性は低いと感じる。
相談の基礎知識	<ul style="list-style-type: none"> • 相談の技術や方法だけでなく、基本姿勢や心構えについても記載があると良い。 • グループ面接における対人的距離や平等に接する方法の情報も必要。 • 「良くない例」「避けた方がよい例」のリストがあると良い。 • メールやSNSの相談についての情報もあると良い。 • 吃音以外の相談への対処(日常生活に関することなど)への対処についての情報が知りたい。 • リフレクティングやクローズド・オープン質問などの発話を用いる技術は、吃音のある人には実施が難しい場合があると感じた。

傾聴相 談ロー ルプレイ
• メンター役、相談者役、観察者役をそれぞれ経験できるのはよいと思った。
• メンターが自己開示しても良いことを明記してもよいかもしれないと思った。

のある人が吃音のある子どもの保護者の心情や悩みを理解したり思いやったりする必要などがあると考えられた。

研究 4

事後アンケートでは、対象者全員が、「メンターにとって有益」、「メンターをする上で役に立つ」を「とてもあてはまる」と回答した。ただし、内容の量や難易度、受講の大変さ、楽しさの各項目は、受講者毎に意見が分かれた。また、個別のプログラムの必要性についても、「とても必要」と回答した対象者が多かった項目（「傾聴相談ロールプレイ」（6名）、「メンターとは」、「実態調査の結果報告」、「吃音の基礎知識」、「相談の基礎知識」（5名））がある一方で、「リソースブック作り」のように少なかった項目もあった（表 5）。さらに、対象者に講座試作版及び養成研修試行プログラムへの意見を求めたところ、多くの修正点や改善点の指摘があった（表 6、表 7）。これらは、対象者はメンター養成研修試行の意義や必要性への理解・共感を示したものの、講座試作版及び養成研究プログラムについては課題や改善が必要と感じていることを示唆している。

「吃音のある人のための、吃音のある人によるメンター講座」プログラムの作成

研究 1～4 の成果を踏まえ、「吃音のある人のための、吃音のある人によるメンター講座」の冊子（総頁数 72 頁）を作成した。作成した冊子は、吃音のある人のセルフヘルプ・グループや、吃音のある子どもの保護者の会に配布した他、ホームページからダウンロードできるようにした。

今後、今回作成した冊子に基づいた、より大規模な養成研修プログラムの試行を行う必要がある。

<引用文献>

- [1]井上他(2011a)発達障害の子どもを持つ親が行う親支援.学苑社.
- [2]小林(2008)セルフヘルプグループによる吃音がある人の支援の現状と展望.コミュニケーション障害学,25,164-171.
- [3]渡辺他(2013)語りにもみる吃音アイデンティティ交渉.ひつじ書房,175-200.
- [4]井上ら(2011b)ペアレント・メンター入門講座 発達障害の子どもをもつ親が行う親支援.学苑社.
- [5]三島(1998)“セルフヘルプ・グループの機能と役割”.セルフヘルプ・グループの理論と展開-わが国の実践を踏まえて-.久保ら(編).中央法規出版,pp.39-56.
- [6]岡(1999)セルフヘルプ・グループ わかちあい・ひとりだち・ときはなち.星和書

店.

[7] Riessman(1965)The “ helper ” therapy principle. Social Work, 10, 27-32.

[8] Borkman(1999)Understanding self-help / mutual aid; Experimental learning in the commons. New Brunswick, NJ, Rutgers University Press.

[9] Riessman (1990) Restructuring Help: A Human Service Paradigm for the 1990 's. American Journal of Community Psychology, 18, 221-230.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

Hiroaki Kobayashi, Yoshimasa Sakata: Characteristics of peer consultations among members of a self-help group. The 2018 Inaugural Joint World Congress of Stuttering and Cluttering. (2018年7月13～16日、広島国際会議場、広島市)(国際会議、発表予定)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

吃音ポータルサイト

<http://www.kitsuon-portal.jp/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

小林 宏明(KOBAYASHI Hiroaki)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号: 50334024

(2)研究分担者

坂田 善政(SAKATA Yoshimasa)

国立障害者リハビリテーションセンター・学院・教官

研究者番号: 20616461